

## 多和田葉子「ペルソナ」における遊歩者の表象

邢 亜南

本発表では、多和田葉子「ペルソナ」(1992)における「遊歩者」の表象を分析することを通して、この作品を再読したい。発表者はこれまで多和田葉子の作品を研究してきたが、とりわけ関心を持つのはその初期作品である。創作活動の出発点に当たる初期作品に立ち戻ることは、作家として成熟していく過程を俯瞰する手掛かりとなるだけでなく、出発期から現在に至るまで持続的に抱え続けている文学的関心を探る上でも重要な契機ともなる。その中で、これまであまり注目されてこなかった遊歩者という人物形象が浮かび上がってきた。この形象は『百年の散歩』において最も顕著に表れているが、その雛型は「ペルソナ」に遡ることができる。本作はほぼ同時期に発表された他の作品に比べると、それほど注目されていないものの、異国の都市を遊歩する行為やそれに内包される境界侵犯性に焦点を当てることで、多和田の初期作品における新たな意義を見いだすことができる。

題名が示すように、本作はドイツで留学している日本人女性道子の日常を通じて顔と仮面というテーマが多層的に書かれた作品である。先行研究では、顔と仮面のせめぎ合いから人種やジェンダーを含む様々な境界線がテキストに書き込まれることが議論された。しかし、道子の遊歩行為について検討された例はまだ見当たらない。

本論では、道子の遊歩を二つの部分に分けてその詳細を考察していく。前半では、道子の遊歩が掘り起こした歴史を考察しながら、彼女の遊歩が「見る／見られる」という視覚的枠組みに依存しながら、他の身体感覚を喚起する特徴を明らかにする。後半では、道子の面を被って街を歩き回る行為に焦点を当て、能の文脈における喪失と救済というモチーフと結びつけて検討する。最後に、「隅田川の皺男」や『百年の散歩』における遊歩者も視野に入れ、多和田文学における遊歩者の系譜を浮き彫りにすることで「ペルソナ」の持つ意義を明らかにしたい。

## 多和田葉子「ペルソナ」における遊歩者の表象

中山大学 邢 亜南

### 1、はじめに

1992年に発表された「ペルソナ」<sup>1</sup>は多和田の初期作品の代表作といえる。弟の和男と共にハンブルクで留学している道子を中心に語る本作は、道子が精神病院の図書室で働く友人のカタリーナから、同じ病院で働く韓国人の看護夫セオンリョンが病人を犯したと疑われる事件を聞かされることから始まる。院内では数回にわたって会議が行われるが、東アジアの人間の顔は優しそうに見えるが、表情がないので、その下に残忍さが潜んでいるという噂が広まり、セオンリョンは胃を壊して別の病院に入院した。道子がこのことを弟と話したら、二人の意見が違うことが明らかになる。翌日、道子は朝早くからアパートから出て街を歩きだした。その日が家庭教師をしている佐田さんの家に行かなければならないと思いつつも、街を歩く衝動に駆られる。そしてつい急いで佐田さんの家に来たが、上の子の誕生日パーティーだった。そこに溶け込めない道子は隙を見て壁にかかっている「深井の面」を外して、自分の顔に被ったまま街に出て、歩きだした。

異国に生きる日本人女性という設定は多和田の初期作品によく見られるパターンである。しかし、「ペルソナ」は異国の都市を遊歩する行為を中心に、歴史、身体と記憶が交錯するという新たな展開を示している点で、ほぼ同じ時期に発表されたほかの作品とは一線を画す。本作に関する先行研究は少なく、主に顔<sup>2</sup>や境界線<sup>3</sup>の問題に焦点を当てた論考が見られるものの、道子の遊歩行為やその遊歩が歴史や記憶といかに絡み合うかという点については十分に論じられていない。本発表では、道子を遊歩者と位置づけたうえで、その遊歩行為に注目し、以上の問題を分析し、そこに抵抗の契機が孕まれていることを明らかにしたい。

### 2、歴史を掘り起こす遊歩

作中におけるハンブルクという都市は、道子の遊歩に必要な不可欠な物質的基盤を提供するだけでなく、彼女の遊歩を通して、外国人労働者を受け入れるドイツの歴史が作品の表面に浮か

<sup>1</sup> 初出は『群像』1992年6月号。本稿における「ペルソナ」からの引用は、講談社による文庫本（2010年）に収録されるものに拠る。以下から、多和田葉子「ペルソナ」、頁数と略す。

<sup>2</sup> 鈴木智之は「ペルソナ」における顔の問題に焦点を当てて、本作を顔の「現われなさ」<sup>2</sup>を主題としたものだと指摘している（「異邦の顔——多和田葉子『ペルソナ』における他者の現れ（なさ）」『顔の剥奪——文学から「他者のあやうさ」を読む』、青弓社、2016年、105—137頁）。

<sup>3</sup> 疋田雅昭は「ペルソナ」に書き込まれる健常／異常、ジェンダー、国籍など多くの境界線の問題を中心に論じている（「錯綜する境界線——多和田葉子『ペルソナ』論——」『移動と立教大学日本文学』113巻、2015年1月、149—182頁）。

び上がってくる。道子がエルベ川沿いの近くまで来て、冷凍魚を加工する工場で働くトルコ人の女性労働者たち、難民、アルバニアからの青年と遭遇する設定は、単なる偶然として片付けることはできない。なぜなら、これはドイツが外国人労働者、再定住者、難民を受け入れる歴史を強く想起させるからである。第二次世界大戦後の西ドイツは経済復興のための労働力が足りないという難題を解消するために、イタリア、スペイン、トルコなどとの間に労働力を受け入れる政策を実施し始めたのである。また旧ソビエト連邦の解体とともに、ポーランドやルーマニアなどからドイツ系の移民（再定住者）が再びドイツに流入してきた。このような移民の流れは、道子が出会う人々を通じて作品の中に浮かび上がるのである。その中で労働者を受け入れる政策は第一次オイル・ショックのよって一時的に停止したが、「トルコ人の数は、1983年にドイツ政府が帰国奨励策を打ち出して帰国者を援助したために1984年には一時的に減少するものの、一貫して増え続けている。そうして在独トルコ人が現在ドイツ総人口の2.5%を占めるまでになった」<sup>4</sup>のである。とくに注目すべきは、1970年代末期から労働力としてドイツに受け入れられる外国人の中からドイツ語で作品を発表した人が出てきて、1985年にはドイツ語を母語とせず、ドイツ語で文学活動を行っている作家が選考の対象とされるシャミッソー賞が設立されたことである。シャミッソー賞の受賞者の中でトルコ出身の作家が最も多いだけでなく、女性作家たちの活躍が特に目を引く。道子が「ドイツに住みドイツ語で小説を書いているトルコ人の女性作家たちについて」<sup>5</sup>の論文を書こうとする設定は、この状況を色濃く反映しているといえる。道子の遊歩を通じて、ドイツが外国人労働者、再定住者を受け入れる歴史が掘り起こされる中で、ハンブルクは単なる都市にとどまらず、ドイツ全体の縮図として機能するようになる。ここで現在と過去が重層的に交差し、想起の空間として変容していくのである。

### 3、新しい女性遊歩者としての道子

周知のように、19世紀のパリを無目的に歩く回るブルジョワ男性のことを指す「遊歩者」という人物形象は、その登場時点から、ブルジョワ男性の経験の特権的に称揚し、女性の存在が不可視化され、あるいは排除されている状況を典型的に反映している。これに対して、レベッカ・ソルニットは、1850年代と60年代のデパートの開店によって公共の場に姿を表すことに「女性遊歩者の起源がある」<sup>6</sup>と指摘している。つまり、消費者であることは自らが消費される商品（売春の対象）でないことを証明しているわけである。だが、消費のために街に出ることは、女性遊歩者が男性遊歩者と同じく無目的に都市を歩くことを妨げるだけでなく、その行動範囲が消費とかかわる空間に限定されるという側面も否定できないだろう。女性遊歩者を論じ

<sup>4</sup> 島途健一「『文学』と『現実』の間——ある在独トルコ人女性作家の社会性——」、東北大学『国際文化研究科論集』（10）、2002年、168頁。

<sup>5</sup> 多和田葉子「ペルソナ」、57頁。

<sup>6</sup> レベッカ・ソルニット『ウォークス——歩くことの精神史』東辻賢治郎訳、左右社、2017年、399頁。

る際、往々にして消費と結びつく「目的」のことをどのように位置づけるかが依然として重要な問題である。この点は朝早く出る道子が朝早くでかける場面に顕著に表れている。和男に「どこへ行くの」と聞かれると、道子は「佐田さんの奥さんに変圧器を買ってくると頼まれたから」と答える。

しかし、道子は目的と消費と結びつけられる女性遊歩者の枠から逸脱している側面を持っている。それは、「本当は行きたいところがあるのに恐ろしいので先へ先へと延ばしてるようでもあった。本当に行きたいところが他にあることは道子にも分かっていた。ただ、それがいったいどこなのかが分からないのだった」<sup>7</sup>と表現されるように、まず目的を持つ遊歩を拒否することに現れる。何よりも道子の遊歩に貫かれているのは、「避けたいと思っていたところへ一歩ずつ深く踏み込んでいった」や「足が止まらないのだった」<sup>8</sup>といった、主体の統御を失う感覚である。「避けている通りや避けている地区」は、ここで無意識の表出として、都市の表面に覆われた歴史のことや身体に刻みこまれた記憶のことを指すことができる。道子の遊歩は、意識と無意識が交錯し、都市の中に埋もれた過去の痕跡を掘り起こす旅のように描かれる。

#### 4、境界を攪乱する遊歩

遊歩者を論じる際に、ジェンダーのほか、遊歩者と群衆の関係にも目を向ける必要がある。見遊歩者は単に都市の群衆の中の一人物ではなく、群衆の中に身を置きながらも、同時に群衆を対象として観察する存在である。言い換えると、観察者と観察対象という構図を保つため、遊歩者は群衆と適度な距離を保つことが重要となる。ところが、道子は他の地域から来た外国人と遭遇する場面では、いずれの場合においても観察者と観察対象の境界が打ち崩され、自己解体的な様相を呈しているのである。例えば「女たちの服には魚のにおいが染み込んでいた。そばを通る時、道子の口の中に唾液が沸いた」<sup>9</sup>のである。このことは、身体が密閉されたものではなく、外部からの刺激を受ける多孔質なものであることを示唆している。同時に、嗅覚を媒介とした身体的結びつきが、道子と彼女たちとの間に生成されたのである。続いて道子は難民の収容所とプレハブのアパートの近くを通った際、それぞれ黒人の男たちとアルバニアからの青年に声かけられたのである。彼らと言葉を交わすことは、道子の観察者としての立場に揺さぶりをかけるのみならず、彼女自身が「外国人」であるという他者性を強く意識させる。そして同時に、韓国人やベトナム人と区別される「日本人」としての自己証明は、道子に求めている。道子の遊歩は、和男と共に住むアパートと佐田さんの家という二つの場を起点としている。これらの空間に居心地の悪さを覚え、そこから出ることは、「日本人」という自明視されてきたアイデンティティへの揺さぶりから起因すると考えられる。この揺さぶりは遊歩を通し

<sup>7</sup> 多和田葉子「ペルソナ」、32 頁。

<sup>8</sup> 多和田葉子「ペルソナ」、38 頁。

<sup>9</sup> 多和田葉子「ペルソナ」、39 頁。

てさらに「外国人」という集団アイデンティティに絡み合い、道子の他者認識と自己認識のねじれを引き起こす。そして、このねじれは彼女の自己分裂を一層深めていく。

## 5、面を被ったまま歩くこと

これまで論じたように、道子の遊歩は、安定した秩序から逸脱する意味を帯びながら、同時に自己解体、自己分裂的な様相を呈しているのである。このことをどう解決するかということ念頭において、最後では深井の面」を被ったまま街を歩き回ることについて考察する。

能の女面において「深井の面」は子を持つ中年女性を表し、『海人』『隅田川』といった狂女物の演目で登場することが多い。これらの狂女は夫あるいは我が子を失ったことが多いため、「愛しい夫や子どもにも再会すれば、狂女は狂乱の状態から正気にかえるのが一般的な結末である」<sup>10</sup>。つまり喪失によって引き起こされた狂気が、その対象の回復によって回復されるのである。「精神病院という言葉が背後から聞こえた」<sup>11</sup>と表現されるように、面を被ったまま街を歩き回る道子は狂気に陥ると思われている。「深井の面」に孕まれる喪失と回復のテーマと合わせて見ると、道子の行為は、喪失とそこからの回復を求めることとして考えられるだろう。能面を被ることが自分自身の顔を隠すこととなるから、道子の喪失感はず顔の喪失から由来すると考えられる。作中には道子の顔が日本人らしくないことが数か所で示されていることと合わせて見ると、典型的な日本人の顔とされる能面を被ることは、失われた顔を回復しようとする理解できる。しかし、皮肉なことに、道子が一番日本人らしく見えたこの日に、「人々は道子が日本人であることに気づかないのだった」<sup>12</sup>ため、顔の喪失は解決される見込みがない。そして、能面を被る道子は和男が待っていると思われる中華料理屋をいくら探しても見つからない。これは、顔の喪失やアイデンティティの揺さぶりは決して解決されず、むしろ宙吊りされることを示唆している。換言すれば、道子の遊歩は、安定した場所に着地することを意味するのではなく、歩くことそのものが彼女の拠り所であるということを語っている。

## 6、終わりに

ここまで分析してきたように、道子の遊歩は、都市や身体に刻み込まれる歴史と記憶を掘り起こし、安定した秩序からはみ出す抵抗の可能性を持つ。こうした女性遊歩者の人物形象は本作をはじめとして「隅田川の鯽男」「変身のためのオピウム」「百年の散歩」などにも頻繁に登場し、新たな系譜を生成した。多和田の初期作品には同時代性や歴史とのつながりが希薄だと思われるが、遊歩を通して歴史と記憶を前景化させる「ペルソナ」も十分注目に値する作品と言える。

<sup>10</sup> 松岡心平編『能って、何?』、新書館、2000年、89-90頁。

<sup>11</sup> 多和田葉子「ペルソナ」、74頁。

<sup>12</sup> 多和田葉子「ペルソナ」、76頁。